

うちに來るって本氣ですか？

【改訂版】

作 石原美か子

（上演時間 約九十分）

本作品は、二〇一三年テアトル・エコーによる上演の際、作者自らオリジナル版に加筆修正を施した改訂版です。

【登場人物】

御殿場 縁	(ゴテンバ ユカリ)	長女	二十九歳	中小企業勤務
御殿場 太郎	(ゴテンバ タイチロウ)	長男	二十七歳	ミステリー作家もどき
御殿場 真琴	(ゴテンバ マコト)	次女	二十四歳	大学院生
御殿場 忍	(ゴテンバ シノブ)	次男	二十二歳	大学四年生
御殿場 百子	(ゴテンバ モモコ)	三女	十九歳	浪人生
蝮田 聖巳	(マムシダ キヨミ)		二十八歳	フリー編集者
相良 不見夫	(サガラ フミオ)		二十九歳	縁の紹介相手 保育士
お爺ちゃん		兄弟姉妹の祖父		

【場所】

御殿場家の居間

暗転中
シリアスで重厚な曲が盛り上がる。

明転
居間に佇む縁が照らし出される。

縁、パソコンのディスプレイを見つめ、困り果てた顔で固まっている。手に持った袋からヒマワリのタネが、ペット用食器へと止めどなく注がれている。

呼び鈴の音。

近所の人（声） 御殿場さーん。回覧版ー。御殿場さーん。

縁、気づかずに固まったまま。

百子（声） はい。

百子、居間の縁には気づかずに廊下を横切る。その途中、足元の何か（座敷童）を手ですくい上げ、肩に乗せて玄関へ。やがて百子、回覧版を手にして、居間へ入ってくる。縁を見てギョツとする。縁、何も言わずに、まず、奥の間の襖を開ける。

百子 お爺ちゃん。テレビちょっと小さくしてくれる？ ごめんね。
お茶はいい？ そう。

シリアスな曲、消える。
百子、まじまじと縁を眺めて、

百子 何してんの、縁姉ちゃん。

縁 （すぎるように）百子。

百子 なに。

縁 駄目だ。

百子 へ？

縁 もう駄目、あたし駄目、どうしよう、百子。

縁、ヒマワリのタネ袋を振り回しながら百子に詰め寄る。
ばらまかれるヒマワリのタネ。

百子 ちよっと、ちよっと、お姉ちゃん。

縁 もうって言うか、もともと駄目なのよ、あたしそういうのは。
（混乱しつつも嬉しそうに）男の人とか、お付き合いとかが、
もう全然駄目。駄目にできてるの。駄目もと。駄目もと？

それちよつと意味違うわね。ああとにかく、駄目な私にいきなりこんな追い風、追い風？違うわね、討ち入り？違う違う、追い討ち。そう、追い討ちが…

ちよつと待った。タネ、ヒマワリ、タネ。

縁 (床見て) あ、こぼれてる。(袋見て) あ、すごい減ってる。

百子 何やってんの。

二人、こぼれたタネを集めながら、

縁 ごめん。いや、あの、今ね、ステキチにこれをあげようと思つて。で、何気なく覗いたらメール届いてて。

百子 え、例の結婚情報サービス？

縁 しっ。

百子 大丈夫。みんな部屋だよ。

縁 ほんと？

百子 お母さんは？

縁 道明寺さんところ、お茶しに。お父さん、出張だから。

百子 そりや当分、戻って来ないね。

縁 本当に大丈夫？

百子 平気。真琴姉え、昨日から徹夜で論文やってる。忍兄いは、まだ寝てるんじゃないかな、帰り遅かったし。

縁 太一郎は？やけに静かだけど。

百子 べ切前みたい。ここには出て来ないってば。

縁 うーん。

百子 (タネが山盛りになった器を見て) うわ、こんなに食べたらステキチからヒマワリが生えちゃうね。

縁 はああ。

百子 なに。

縁 またサラッとそんな可愛いこと言っつて。この小悪魔。(メモをとる)

百子 (無視してディスプレイを覗き込み) 「こんにちはユカリーナ」…ユカリーナ？

縁 ひゃあああ。(奇妙な格好で悶える)

百子 しいっ。

二人、周囲を伺う。
百子、立ち上がって祖父の部屋の襖を開け、

百子 (祖父に) 何でもないよ。大丈夫、寝てて。(縁に) もう。

縁 ごめん。だっぺいきなり。

百子 なんだ、結構いい感じなんだ？

縁 そんな、べつに。

百子 (ディスプレイを覗いて) サガラ、フミオ？

縁 あああああ。

縁、いきなり立ち上がって壁のカレンダーにへばり付き、
物凄い勢いで次々と日付に丸を付けていく。
(カレンダーには百子の模擬テストの日が丸してある)

百子 やめて。どれが模擬テストの日かわかんなくなっちゃう。

縁 あんたが、いきなりそんな、名前なんて言うから。

百子 もう何なの、一体。

縁 会いたって言われちゃったの。

縁・百子 ……

百子 (頷きながら拍手)

縁 (照れて) やめてよ。

百子 それって、いつ？

縁 今日の夜。突然。

百子 デートだ。

縁 いやああああ。

百子 しっ、お爺ちゃん、びっくりして、寝たきりなのに歩いちゃうよ。

縁 ごめん、ほんとにごめん。

百子 何処行くの？

縁 わかんない、駅で待ち合わせしようって。

百子 ほんとにデートみたい。何着てく？

縁 え。

百子 服。あるの、お姉ちゃん。

縁 服？

百子 第一印象って大事だよ。すごく。もしあれなら、真琴姉えに借りれば……

縁 駄目よ、そんなの。皆にバレちゃうでしょ。服って？

縁、居間にある洋服掛けから服を外してばらまき、選び始める。

百子 いいよ、もう知られたって。お父さん、喜んで入会金くらい出してくれるよ。結構高いんですよ。入会金と紹介料で……あれ、こういうのって何年契約とかあるの？

縁 二年。

百子 そうなんだ。で、幾ら？

縁 税込み三十六万。

百子 高っ。

縁 分割。決まってるでしょ。

百子 分割。

縁 月一万円ずつの三十六回払い。

百子 って、三年？契約二年で支払いは三年？

縁 幸せは一生。

百子 ポーナスは？出たんでしょう？

縁 出るわけないじゃない、あんな小っちゃいところ。出たことないわよ。寿退社したって祝い金も出ないわよ。ああそうだ、百子。

百子 ん？

縁 三千円、返して。

百子 (ディスプレイを眺めてわざとらしく) ああっ。相良さんもポストペット使ってる。

縁 あ、そうそう、そうなの。

縁、ばらまいた服を片っ端から羽織り始める。
百子はディスプレイを凝視したまま、縁の行動には気づかない。

百子 なに、このネズミ色のって。コアラ？

縁 ああそれ、大仏。

百子 だいぶつ？

縁 ボブっていうの。

百子 ……ふうん。あれ、お姉ちゃんのとって象じゃなかった？ピンク色

のやつ。

縁 ああ、タイチロウ？

百子 お兄ちゃんの名前、つけてたの？

縁 言わなかった？少し前にあの子、ネタが思いつかないとか言っ
て暴れたでしょ。その時、あたしのお茶碗割ったの。頭きた
からポストペットにあの子の名前つけて、こう、が
クリックして。そしたら、二三日前に家出しちゃった。

百子 ひどい。可愛かったのに、ピンクの象。

縁 白よ、ほんとは。叩いたからピンクになったの。

百子 ……

縁 だから今は小鹿。ババンビちゃん。(デイスプレイを覗いて)

あ、ボブと仲良くしちゃって。いやーん。あたしと相良さん
を見てみたい。なんて、言っちゃった、もう聞き流して、
百子ったらっ。

百子、とんでもない重ね着をした縁を目の当たりにする。絶句。
パソコンから妙な音。(相良のポストペットが出て行く合図)

縁 あ、ボブ帰っちゃった。

百子 驚くよ、ボブだって。いくら大仏だってそりゃ見放すよ。

縁 なに、やっぱりこの襟の形、似合わない？

百子 何て言えばいいのかなあ。あ、そうだ。お洒落を真似したい人
とかいないの？

縁 ああ、マリちゃんとか？

百子 あ。知らないの、お姉ちゃん。

縁 なに。

百子 忍兄い、フラれた。

縁 マリちゃん？

百子 しかも、二股。

縁 二股？それ、どういうことよ？

変な格好のまま、縁、座り込んで話に身を乗り出す。

百子 ゼミのOBとも付き合ってた、で、そっちが結婚話にまで進ん
だみたい。

縁 まったくこれだから、ちょっと愛嬌のある顔してると…落ち
込んでるでしょ、忍。

百子 見てらんない。フラれてから、何か、合コンとか。

縁 だからなの、あの靴。

百子 厚底の？ヒールがこんなにある？

縁 そうそう。

百子 痛々しいよね。この前も、こっそりあたしの部屋に来て、俺の運勢どうなのか座敷童様に訊いてくれないか、って真剣な顔でさ。あたし、もう何て言ったらいいかわかんなくて。

縁 そういやいたわね。そんなのも。

百子 恐くて訊けるわけないよ、忍兄いの運勢なんて。良いはずないし。

縁 今もいるの、ザッシー。

百子 (見回して) いるよ。何で？

縁 ねえ、服のこととか訊いてくれない？もともとザッシーの薦めるところに入会したわけだし。

百子 ほらそこ、お姉ちゃんの目の前。おっと：

座敷童、テーブルの上を走っているらしい。百子が目で追う。やがて、ディスプレイの前で止まったらしい。同時に、メール着信の奇妙な音が鳴る。

縁 あ、ボブ。

百子 また来たよ。ボブ。

縁 (座敷童がいるらしい位置を握り締めて) なに、このメールが何なの、読んだほうがいいの、読まないほうがいいの、はつきり言って。言いなさい。言え。

百子 潰してる、肘で潰してる。

縁 (メールに注目して) え、「緊急連絡」。

百子、縁の肘の下から座敷童を救い出し、耳を寄せる。

縁 なになになに。「今夜、お会いする予定でおりましたが・・・結婚を前提としたお付き合いになるかと思われそうです・・・当方としては、ご家族親族の方々とも親しくさせて頂いてきたいと・・・恐縮ですが本日、直接・・・

縁・百子 うちにやって来るのお！

家の奥からガタガタガタツという物音が響く。

真琴(声) 何だ、これはあ！

真琴、論文や資料やらを手居間へ駆け込んでくる。

縁 真琴？

真琴 (指先を見つめて) ちよっと何なの、トイレのノブに何か刺さってた。いったあーい。

百子 どうしたの。

真琴 何かチクッした。針みたいなの。何なの、もう。全然論文、進まないじゃない。昨日の夜だって、隣から忍の嗚咽が漏れてきて。

縁 嗚咽。

真琴 マリちゃあんって。で、不意に面接の練習始めるのよ、えー御社を志望した動機は：：で、また急にマリちゃあん：：って、もう何度怒鳴り込んでやるうかと：：(縁の格好を見てサラッと) あ、お祭りって今日なんだ。

縁 ええと、修士論文？

真琴 来週、中間発表。あ、夕方から研究室行くから。

縁 出掛けるの？ どうせなら早く行けば？ 今すぐとか。

真琴 なんで。

百子 (割って入って) トイレで論文書くのやめて、長いんだもん。

真琴 あそこってメモ用紙に困らないから。あつ。

縁 なに。

真琴 (指先を見て) 何これ、ピリピリしてきた。

百子 刺したとこ？

真琴 何これ何これ何これ。

縁 まさか、毒針だったとか？

百子 何でうちのトイレに？

真琴 うわうわうわ。

縁 しっかりして、真琴。

真琴、一瞬フラリとなるが、勇ましく指先の毒？を吸い取って吐き出す。

真琴 ペっ。：：大丈夫。

百子 大丈夫なの？

真琴 平気。慣れてるから。ヘッポコ兄貴のやることなんか。

縁 え、太一郎？

真琴 始まったんでしょ。また。あのヘッポコのスランプ。

縁・百子 あーっ。

太一郎（声）ヘッポコ、ヘッポコ、言うんじゃない！

太一郎、牛乳パックを手に居間へ飛び込んで来る。

太一郎 俺の仕掛けた密室トリックに引っ掛かっておきながら、何をほざいている、真琴。

真琴 ヘッポコ雑誌にヘッポコ連載してるヘッポコ作家のヘッポコトリック？

太一郎 ヘッポコヘッポコヘッポコヘッポコ、言うな。

真琴、太一郎を無視して論文を書き始める。

太一郎 うちの今にも取れそうなやる気のないドアノブに救われたな、真琴。本来ならお前はチクツとした指先の痛みなど気にせず中に入り、ドアを閉めて鍵を掛け、便座に腰掛けた途端、体に異変が襲いかかる筈だったのだ。そして俺はこっそりノブから針を取って捨てる。どうだ、これで完全な密室だ。どうだどうだどうだ。

縁（遮って）太一郎、牛乳はコップで飲みなさい。（コップを渡す）

太一郎 あ、うん。

百子 もう。スランプになる度に密室トリック仕掛けるの、やめてってば。

太一郎 いいか、モモ。小説書くっていうのはな、イメージトレーニングが大事なんだ。だから兄ちゃんはこうやって……

縁 座って飲みなさい。

太一郎 あ、うん。（正座する）

百子 イメージじゃないじゃん、実際に仕掛けてるじゃん。お爺ちゃんとか、ステキチが引っ掛かったらどうするの。

縁 あんた、針に何塗ったの？

太一郎 え、オロナイン。

百子 ピリピリするって……

真琴（おぎなりに）ごめん、スースーする、だった。

太一郎 だって刺さったら血、出るから。（縁を見て）あ、祭りって今日なんだ。（タネを見て）なんだこれ？昼飯？

縁 あんたステキチにあげてきてよ。

太一郎 俺？

縁 最近、全然面倒みないじゃない。

太一郎 (聞いてない) 昼飯まだ？母さんは？

百子 道明寺さん家。

縁 ちよつとあんた、聞いている？

太一郎 何か作って。

縁 なんでいつも私なの。たまには真琴やって。

百子 あたし、そうめんはもうヤなんだけど。

真琴 牛乳飲んでるヒマあるんだから、自分でやれば？

太一郎 べ切。それどころじゃない。

真琴 あたしだって忙しいの。あたしの論文は、ちゃんと、世の中の役に立つんだから。

太一郎 あ、今の聞き捨てならないな。(腰を浮かす)

縁 座って飲む。

太一郎 (正座し直す) どういう意味だ、真琴。

真琴 そうだ、あたし、トイレ入ろうと思ったんだ。(立ち上がる)

太一郎 おい。

百子 (太一郎を抑えて) ね、ね、真琴姉え。

真琴 なに。切羽詰まってただけど。

百子 あのさ、さっきって、ノブに触っただけなの？

真琴 そうよ。

百子 じゃ、あの凄い音、何だったんだろう。

縁 あっ。

真琴 二階の方で聞こえた気がするけど……

縁・真琴・百子 ……

百子 忍兄いだ！

百子、走り出しかけてハッと振り返り、
テールの上から見えない何か(座敷童様)を肩に乗せ、
居間から飛び出して行く。

太一郎 (座敷童様のいた位置を見て)ここ？ここにいたの？ザッシー？

真琴 本当に見えるの？あの子。

縁 あんた、忍の部屋にも何かしたの。

太一郎 死ぬようなトリックじゃない。

縁 ほかにもどこか何かしたの。

太一郎 (重々しく) 姉ちゃん、俺にとっては、この家すべてが密室なんだ。

縁 (半笑い泣き) 何を言ってるの？

真琴 玄関のも何かしたでしょ。鉢植えがずれてる。

縁 やめて、今すぐこの家を普通にして、お願いだから。

太一郎 それはできない。

真琴 どこに仕掛けたか自分で覚えてないでしょ。

太一郎 さっさと便所行け。

真琴 べ切なんて過ぎてるんじゃないの。どうせ。

太一郎 (動揺して) 何を…

真琴 また泣かれるよ、担当さんに。何だっけ、あの、すごく人の好きそうなおじさん。

縁 丸紅さん。

真琴 そうそう。あんな福耳の人、泣かしたら罰当たるって。

縁 過ぎてるの、べ切。

太一郎 あとはもう、ちょいちょいと書くだけなんだ。ただやっぱりこう、目の前で誰かが引っ掛かってくれないとやる気が…

縁 困る。今すぐ家をちゃんとしてくれないと…

真琴 誰か来るの？

縁 ……

百子(声) お姉ちゃん、ちょっとちょっと助けて。

百子に抱えられ、首やら体やらにロープを巻きつけたパジャマ姿の忍、朦朧としながら居間へと倒れ込む。

縁・真琴 忍！

縁・真琴・百子、慌ててロープを外し、忍を何とか座らせる。

縁 しっかりして。眠っちゃだめ。

忍 (ハツと意識を取り戻し、畏まって) ……あ、勤務地は何処でも構いません、僕、次男なんです…

百子 忍兄い、ここは家だよ。

忍 (周りを見回して) えっ。

真琴 大丈夫？

忍 夢か。

縁 面接？

忍 うん。やけにきれいな花畑に建ってる会社だった。

縁・真琴・百子 ……

縁 お水、持って来ようか？

忍 いや、いい。(縁を見てサラッと) あ、お祭りって今日なんだ。

太一郎 ダラダラダラダラ、昼過ぎまで寝てるからこんな目に合うんだ。

真琴 あんたのせいでしょう。

太一郎 相変わらずガキだなあ、お前は。

百子 ちよつと、お兄ちゃん。

真琴 ほら、黙ってないで、お前も何か言い返せ。

忍 ダラダラ？年中ダラダラしてる奴に言われたくないな。

縁・真琴・百子 おっ。

太一郎 なんだ？

忍 いや、別に。何でもない。ま、就職活動もしたことない奴に言っても、どうせ無駄だし。

太一郎 ……

忍 こんなわけわかんない悪フザケばっかやっててさ、仕事してるんだか、してないんだか、家に金も入れないでさ、縁姉ちゃん見習えよ、会社潰れかかってるのにちゃんと金、入れてるんだぜ。

縁 別にそんな。当たり前よ。

忍 大体、兄貴、縁姉ちゃんのこと、考えたことあんの？あんたがそんなだから、姉ちゃん、結婚諦めたんじゃないか。

縁 諦めてないわよ。

四人 ……

真琴 お姉ちゃん。

縁 なに。

真琴 諦めてないんだ。

縁 えっ。

忍 どれもこいつも結婚しちまえばいいんだ、ちくしょうつ。

真琴 あ。あんたフラれたでしょ、マリちゃんに。

忍 百子。

百子 言っていない、言っていない。

太一郎 マリちゃん、あの愛嬌のある子か。顔立ちが前方後円墳みたいな。

忍 うるさい。

真琴 昨日、あんたのいない時、電話あったよ。

忍 えっ。マリちゃんから？

真琴 暗い声して、あんたの夢を見たとか言ってる。

忍 俺の夢を？

真琴 そう、あんたがいきなり赤ん坊を抱いて訪ねて来て、「あなたの子よ」って迫ったんだって。

忍 何だよ、それ。

太一郎 その赤ん坊ってのはやっぱり前方後円墳型の……

忍 うるせえ。それでマリちゃん、何て？

真琴 忍君に体調の変化はありませんかって。

忍 ないよ。あるわけないだろ。

縁 そうよ。あるわけないじゃない。

忍 言ってやってよ、縁姉ちゃん。

縁 だってまさかそんな。……私より先に？

忍 先にも後にもないの。

百子 でもマリちゃんってそういう、何て言うの、勘、鋭かったし。

太一郎 そういやザツシーも見えたとか言ってたろ。

縁 じゃ、まさか予知夢？私より先に？忍が？

忍 勝手に話進めるなよ！だから俺は男だから赤ん坊なんて……

メール着信音。
忍、目の前のディスプレイをつい眺める。

忍 「緊急連絡、その二」。

縁・百子 うわああ。

慌てふためく縁と百子、忍を押し退けてパソコンを隠そうとする。
突き飛ばされて倒れる忍。

真琴 緊急連絡？

忍 (朦朧と) 駅に着いたって、誰が？

縁 なに読んでんのよ。(忍を蹴り飛ばす。忍、失神)

百子 忍兄い。(忍を揺する)

真琴 ああもう騒々しい。誰か来るんでしょ、お姉ちゃん。

縁 えっ。

真琴 だってさつきから、そわそわしてるし。

縁 そんなことないわよ。あ、もうこんな時間？大変大変、早くお米呼びに行つて、お母さん研がなくなっちゃ。

真琴 ほら。

太一郎 誰。姉ちゃんの友達？

縁 いや、だから別に誰も。

百子 (縁に小声で) 言っちゃえば？

縁 なに言ってるの。そんなこと…

百子 どうせいつか知られるんだし。いっそ今ここで。

真琴 なにコソコソ話してるの。

忍 百子は知ってるのか。

百子 ええと。(縁を促す) ほら。

太一郎 モモは知ってて、俺には内緒？

縁 別にそんなわけじゃ。

太一郎 なんか最近、素っ気ないよな、姉ちゃん。前はまず俺に相談してくれただろ。どうして。俺が一人で牛乳飲んじやうから？
わかってんなら少しは残しとけよ。もう充分育ってるんだからさ。

太一郎 うるさい。お前だってパック開けられないだろ、ちゃんとこの菱形がちゃんと菱形になってないよ。ボロボロで。注ぎにくいだろうが。

忍 だからなんだ。最後にパック洗って切って開いてんの、いっつも俺じゃないか。

真琴 ちよっとちよっと近所に聞こえるから。(縁に)で、結局、誰が来るの？

兄弟姉妹、縁に注目する。百子、縁に頷いて見せる。

縁 あの：：言おうと思ってたんだけど：：今日、実は：：：：：

電話が鳴る。反応する太一郎、忍、縁、縁、慌てて電話を取る。

縁 はい、御殿場です。あ、いつもお世話になってます。ちよっとお待ち下さい。太一郎、丸紅さん。

真琴 (忍に) 残念。

忍 (太一郎に) 出るよ。

太一郎、電話に出るのを躊躇う。

縁 ほら、早く。

真琴 やっぱり、メ切過ぎてるんだ。

百子 平気でしょ、ちよっとくらい。

太一郎 半月、くらい。

百子 え。

真琴 そんなに？

縁 もう、いいから早く出て。

太一郎、渋々と電話に出る。

太一郎 すみませんっ。はい、わかっています、はい：：

縁 すごく暗い声してた、丸紅さん。

百子 危ないんですよ、あの出版社も。

真琴 小さいしね。

忍 姉ちゃんとは？

縁 危ないまんまよ。たぶんずっと。

真琴 来るのって、会社の友達？

縁 ー、そうねえ：：

真琴 珍しいね、初めてなんじゃない？

縁 いや、あのね……

太一郎 ちよつと待って下さいよ。いきなりそんな、無茶ですよ。そりゃ僕が悪いんですけど、だからって。あと三日、三日待って下さい。ああもう、丸紅さん。丸紅さん。あつ。(電話を切られた)

太一郎、力なく受話器を置く。

百子 どうしたの。

太一郎、いきなり居間の中をグルグル歩き回り始める。

縁 ちよつとちよつと、どうしたの。

太一郎 あいつ、福耳ぶりやがって。

忍 何なんだよ、ウロウロすんなよ。

太一郎 お前ら、そんな顔していられるのは今の内だぞ。すぐにこの家には血の雨が降るぞ。ああ降りまくるぞ。そりやもうどしや降りだぞ。

百子 誰の？誰の血の雨？

太一郎 俺。

四人 あ、なんだ。

太一郎 ホツとするなよ。心配しろ。頼む。してくれ。

縁 一体どうしたの？

太一郎 丸紅のやつ、原稿回収のプロを雇いやがった。

忍 原稿回収？

太一郎 たとえ一ページも書けていない原稿でも、あらゆる手段で作家を追いつめ、必ず完成させて奪って行く、特別な訓練を受けたエキスパート。そいつらが通った後にはただ、ボロ布のようになった作家の骸が累々と地平線まで続いているという。

縁 まさか、そんな人が家へ？

太一郎 (頷いて)しかもよりによって新進気鋭の凄腕と噂される、三角倒立の蝮田。

四人 おおお。(恐がりかけて怪訝な顔)

真琴 って、どう恐いの？

太一郎 わからない。よくわからないから恐いんだ。

百子 会ったことは？

太一郎 ある、一瞬だけ。ああ、あの時もっと下手に出ておけば良かった

たかなあ。

忍 どうせまたプロみたいな顔して来たんだろ。

太一郎 プロなんだよ、俺は。

忍 プロ？家に金も入れない、身の回りのことは母さんと姉ちゃんに任せっきり、おまけに仕事のべ切も守れない、それでよくプロだなんて言えるよな。

太一郎 ……

気まずい沈黙。
やがて忍、居間から立ち去ろうとする。

縁 すぐお昼にするけど。

忍 着替えてくる。

忍、居間から出て行く。

真琴 (沈黙を破って) 失恋と就職活動で気が立ってるんじゃない？

百子 マリちゃんもマリちゃんだよ、そんな電話してきて。

縁 諦めがつくんじゃない、そんな無神経な女。(太一郎を伺って) 早くお昼にしなきゃね。その、何とかママシが来るんなら。

押し黙ったままの太一郎、牛乳を飲み干そうとするが気が乗らない。
途中で手を止め、当たり前のように残りを牛乳パックへ戻す。

縁 ちょっと、これ、あんただけのもんじゃないのよ。

太一郎 (聞いてない) あれ、やっぱり忍だったのかなあ。

縁・真琴・百子 ?

太一郎 あ、いやその、先月かな。出版社のパーティがあつて、そこであいつによく似たやつを見掛けてたんだ。

真琴 どこで？

太一郎 クラブ『超合金』。

真琴 『超合金』って六本木の？

縁 まさか、忍がそんなところ。

百子 合コンかもしれない。

四人 ……

真琴 話し掛けなかったの？

太一郎 暗くてハッキリわかんなかったし。それに忍だったとしても、

縁

ちよっと話し掛けらんなかったなあ。
なに？

太一郎

親父と母さんに内緒な。頭悪そうな女と絡まっててさ。(落ちて
いる縁の服を拾って絡みつける)もうこんなかんじで、いや、
もつとすごかったか。もうこんなかんじで。こうなって。こん
んなって……

縁

百子、見ちゃ駄目。(と言いつつ動揺している)

真琴

まあ、あんなんでも男だからね、一応。

太一郎

フラれた腹いせだったのか。

縁

忍かどうか、わかんないでしょ。

百子

そうだよ、違う人じゃない？

真琴

まあどっちにしても、マリちゃんここに殴りこむよりかは。
ねえ？

太一郎

やるかもしれないぞ。運のないやつは他人の幸せを人一倍、
恨めしく思うもんだろ。ま、しばらく家じゃ、マリちゃんの
名前はタブーだな。

縁

そうね、あの子を刺激しないようにしましょう。

真琴

そうしとくか。じゃ、それから幸せキーワードもタブーだね。
デートとか、婚約とか、結婚とか、そういうのは家じゃ
しばらくタブー。ね。

縁・百子

……

真琴

ね。

縁・百子

……

メール着信音。

縁と百子、固まったまま動けない。

太一郎

なんか鳴ったけど。

縁

お隣の風鈴じゃない？

百子

そうそう、そうそう。

真琴

メールだよ。友達じゃないの？

百子

あっそうだ、トイレ。真琴姉え。いいの、トイレ。

真琴

ああっ。(立ち上がって少し辛そうに)危なかった、もう少しで
歩けなくなるところだった……

真琴、論文を持って小走りで居間から出て行く。

百子 お兄ちゃんも早く原稿書かないと。来るんでしょ、何とかママシが。

太一郎 もういいよ。

百子 いいって……

太一郎 忍の言うこともちよつとは合ってる。ここらが潮時かもな。ほら、俺、一応、教員免許持ってるだろ、どこかの臨時教員にでもなってるさ……

百子 ばっかっ。(太一郎の頬を叩く)

縁 百子。

太一郎 何するんだよ。

百子 そんなお兄ちゃん、お兄ちゃんじゃない。あたし、知ってるんだよ、お兄ちゃんが原稿を書き溜めていること。

縁 えっ、そうなの？

太一郎 いや、あれは……

百子 納得いかないから押し入れに入れっぱなしなんでしょ。でもあたし、コッソリ読んじゃったの。面白かったよ。

太一郎 (照れて) 勝手に読むな。

百子 受験勉強のストレスなんて一気に吹き飛んだよ。ザツシーも夢中になって読んでた。

太一郎 (適当なところを指差し、照れて) 勝手に読むな。

百子 こんなすごいミステリー書いたのが自分の兄だなんて、あたしすごく誇りが持てた。だからお兄ちゃん、いつものお兄ちゃんに戻ってよ。

太一郎 しまい込んだやつを引っ張り出してみるか。

太一郎、牛乳パックを持って居間を出て行く。
縁、百子の言葉をメモしている。

百子 (何事もなかったかのように) さ、メール見よ。

縁 本当に小悪魔よね。

百子 (メールを読んで) あっ。

縁 なに。(読んで) 新製品ニュース……

百子 DM。あーあ、お兄ちゃん叩いて損したあ。

縁 悪魔!

百子 いいじゃん、あれでやる気になったんだし。

縁 ……ねえ。

百子 ん？

縁 本当に面白いの？あの子のミステリー。

百子 さあ。

縁 さあ、つて。

百子 読んだことないし。

縁 読んでないの？

百子 読まないよ。頭悪くなりそうじゃん。

縁 じゃあ、押し入れの原稿っていうのは。

百子 あ、それは本当。前にチラッと見たんだ。

縁 それ、もしかして、盗んできたやつ？

百子 は？

縁 ほら、あの子が高校の時、ドンキーから盗んだやつ？

百子 は？何のこと？ドンキーってなに？

縁 文芸部の先輩の。ミステリー書くと、いつも凶器が鈍器で。だからドンキーって……ああ、そうか、あんた小さかったから知らないんだ。そうか、そうか……

百子 なになに？何の話？

縁 聞く？

百子 なになに？

縁 (怖い笑顔で) 桃色ゴーストライター事件。

百子 …誰か死んだの？

縁 死なないわよ。ああ、あの子の初恋は死んだけど。

百子 初恋？

縁 そう、サオリさん。交換日記してたの、太一郎。

百子 あのお兄ちゃんが？

縁 あんなんでも照れ屋だから、あの子。日記の受け渡しをそのドンキーに頼んでたのよ。だけどその日記、途中から彼女の振りをして、実はドンキーが書いてたのよ。

百子 ええっ。

縁 彼もサオリさんが好きだったんでしょ。三角関係。

百子 え、じゃ、そのドンキーが勝手に？サオリさんに頼まれたとかじゃなくて？

縁 勝手にゴーストライターね。

百子 うわあ、ちよっとその人、なんていうか…

縁 ばれた時は大変だったのよ。帰って来たらいきなり泣いて泣いて。で、「悔しいからドンキーのワープロから作品盗んできてやった」って。

百子 盗む、って。

縁 フロッピーに何枚分もあったんだって、彼が三年間書き溜めた作品。

百子 それって、まずいんじゃないの？

縁 でしょう？だから早く始末しなさいって言ったの。それがまだ仕舞い込んであるのかと思っ

百子 押し入れ？ ううん、フロッピーとかはなかった気がする。

縁 そう、ならいいんだけど…

メール着信音。
パソコンにしがみつく二人。

百子 相良さん。

縁 どこ、今、どこなの？

百子 うわ、もうバスに乗るって。どうする、来ちゃうよ。

縁 ええっ、どうしよう、どうしよう、どうしよう。

百子 って、あれ、どうやってメールしてるの、相良さん。(メールをよく見て)携帯か。何だ、思ったよか普通の人かも。ポストペットとか、携帯とか。

縁 当たり前じゃない、あたしの条件にピッタリの人なんだから。

百子 それが不安なんだよね。ねえ、相良さんって格好いい？

縁 写真はまだ。年収もはっきりとは知らないのよ。

百子 それはいいんだけど。仕事はなに？

縁 保父。

百子 保父？

縁 保育園の、保父さん。

百子 子供好きなんだ。いいかも。

縁 そう思う？

百子 写真あるといいのに。

縁 まだサービスの方に、ちゃんとお付き合いしますって報告して

ないから。

百子 とか言つて、もう決めてるくせに、ユカリーナ。

縁 きやあきやあきやあ。

身悶えしながら縁、ヒマワリのタネ袋を祖父部屋へ投げ込む。

百子 そうだ、お姉ちゃん、バス停で待ち伏せしなよ。相良さんが家に来ないように。

縁 そうね、それがいいわね。じゃ……(出て行こうとする)

百子 (掴まえて) 待つて。その格好はまずい、かなりまずい。

縁 あ、そうよね、手ぶらじゃね、バッグ、バッグ。

百子 ええと、あたしのバッグ貸してあげる、この前買ったやつ。それから服も。そうだ、そうしよう。早く部屋に来て。

縁 これ、脱がなきゃいけないの？

縁と百子、居間から出て行く。
入れ違いに真琴、トイレから手ぶらで戻つて来る。

玄関の開く音。
真琴、居間から顔を出し、

真琴 もう、お母さん遅いよ……あつ、すみません。どうぞ上がってください。

蝮田 (声) あの、こちら御殿場さんの……

真琴 (声) そうです。あ、表札見えにくくてごめんなさい。どうぞこちらへ。

蝮田 (声) あいたつ。

真琴 (声) あ、その角、出てるんです。大丈夫ですか。

蝮田 (声) 今ですね、そこで眼鏡をなくしてしまつて……

真琴 え、眼鏡ですか。

蝮田、居間へ入つて来る。
(真琴は彼女を縁の友人だと誤解している)

蝮田 門のところでは何だかこう、ヒュッて音がしたと思つたら、すごく鋭い感じの物が飛び掛つてきて驚いて。それで眼鏡がお庭の方に……

真琴 あ、そうですか。(小声で) バカ兄貴。

蝮田 は？

真琴 枝が風で飛んで来たんですかね、うちの庭って植木が多いんで、
 蝮田 ああ、ヒマワリも素敵ですね。

真琴 あれ、姉が小学生の時に学校からもらって来て、それから毎年
 ずつと。どうぞ。（座布団を勧める）

蝮田 どうも。（座る）

真琴 意外とマメなところはマメなんです、あれでも。会社だと、
 よくミスして迷惑掛けてるみたいですけど。

蝮田 はあ。

真琴 今、片付けますから。（テーブルの資料を片付ける）

蝮田 遅くなりましたけど、私。（名刺を出そうとする）

真琴 いいですよ。次女の真琴です、いつもお世話になってます。

蝮田 いいえ、そんな。伺うのは初めてですから。

真琴 （奥に向かつて）お姉ちゃん。何してるんだろ。

蝮田 あ、お構いなく。

真琴 呼んで来ますね。

蝮田 いいですから。ゆっくりしていくつもりはないので。

真琴 そんな、ゆっくりして行って下さい。じゃ、麦茶を。

蝮田 あの、本当に時間がないので・・・

真琴、台所へ行き、麦茶を用意する。

蝮田、こっそりと三角倒立の練習。前屈みになっている蝮田の後ろを、
 着替えた忍、怪訝そうに眺めながら台所へ。

蝮田 眼鏡ないと距離感が・・・

蝮田、バッグから携帯電話を取り出してかける。

忍 誰。

真琴 お姉ちゃんの友達。

忍 何か変な格好してたよ、こう、前屈みで。

忍、冷蔵庫を開けて中をあさる。

真琴 え、お腹痛いのかな。

蝮田 （電話中）ああ、もしもし、私。蝮田です。

忍 (蝮田ですーに被さるるように) あーっ、俺のパンナコッタがない。誰だよ、もう。

蝮田 (電話中) 予定通り五時までにはそちらへ。ええ、大丈夫です。一、二時間あればきつと。ええ……

忍 (居間を覗いて) 海の日なのにスーツだよ、あの入。

真琴 営業なんじゃない？ 休日返上ってやつ。

忍 営業だとそういうのもあるのか。

真琴 どういうとこ回ってるの、あんだ。

忍 言ったってわかんないだろ、真琴には。

真琴 お姉さん。

忍 ……

蝮田 (電話中) はいわかりました。ああそれから、そこにいるかしら、丸紅さん。

忍 (「丸紅さん」に被さるるように) あーっ、俺が洗つといた牛乳パックは？

真琴 縁側に並んでたけど。お母さん、干したんじゃない？

忍 そう。

蝮田 (電話中) ああそう、ちよつと話があるので掛け直してくれるように伝えてもらえます？ ええ、それじゃ。(切る)

真琴 ねえ、どうしても今年決めたいの？

忍 なにか？

真琴 なにって、就職。

忍 そりゃあ。…親父、再来年、定年だし、縁姉えちゃんそこだつて危ないんだらう？

真琴 羽振りのいい人でも掴まえてくれればねえ。

忍 あんなに男の気配なくていいのかなあ。

真琴 お姉ちゃん結婚させるんなら、あの会社立て直す方が早いよ。あつ、いけない、トイレに論文置きっぱなしだ。あんだ、取って来てくれない？

忍 なんて。

真琴 バカ兄貴が流しちゃうかも。お願い。

真琴、麦茶を持って居間へ。
忍、居間から出る時に落ちているロープに気づく。拾う際にカレンダーについた○に気づく。(縁が付けた○) 忍、居間を出て行く。

真琴 どうぞ。

蝮田 あ、どうもすみません。

真琴 大変ですね、休日なのに。

蝮田 仕事ですから。

真琴 (奥を向いて) 何してるんだろ。

蝮田 でしたら、私がお部屋の方に。(腰を浮かす)

百子、居間へ走りこんで来る。

百子 真琴姉え、ちよつと手伝って、お姉ちゃんが…

百子、蝮田に気づいて固まる。蝮田、会釈する。

真琴 お姉ちゃん、何処にいるのよ。待ってるのに。

蝮田 ですからもうお構いなく。私の方から部屋に。

真琴 いいですよ。呼んで来て、お姉ちゃん。

蝮田 お姉さんより、お兄さんを…

真琴 えっ？

百子、状況を理解し、いきなり走って出て行く。

真琴 百子。ごめんなさい、子供っぽくて。

蝮田 人見知り？

真琴 呼んで来ます、座って下さい。

真琴、居間から出て行く。蝮田、後を追おうとするが携帯が鳴る。

蝮田 ああ丸紅さん。さっき着いたところ。何だか意外と歓迎ムードみたい。いえ、まだなの。部屋に籠ってるみたいね。出て来ないのよ。私、彼には前に一度しか会ったことなくて。あそこ、暗かったし。どんな感じの人だったか、よく覚えてなくて。え、ヒョロツとして、結構ハッキリした顔、一見強気、でも実は弱腰。それは助かるわね。ええっ、牛乳が好きなの？

忍、真琴の論文と牛乳パック(干してあった)を抱えて入って来る。

忍と蝮田、目が合う。

蝮田、蝮田、勢いよく電話を切る。

(蝮田、忍を太一郎と勘違いしている)

蝮田

(笑顔で) どうも。

忍

どうも。

蝮田

(論文を示し) それ、早速、見せていただけ？

忍

これ？ いや、これは俺のじゃないんで。

蝮田

俺の作品とは言えないレベルってこと？ 生意気、言うのね。でも嫌いじゃないわよ、生意気な男は。

忍

え、何言ってるんですか？

蝮田

もしかして、私のこと、覚えていない？

忍

ええ？

蝮田

やっぱりそうなんだ。つれないな。まだ先月なのに。

忍

先月。

蝮田

クラブ『超合金』。

忍

『超合金』……

蝮田

どう、思い出した？ まあ、あそこ暗かったし。あなただいたい酔ってたみたいだし。正直な話、私もあなたの印象、違ってた。もつとヒョロ長く見えたんだけど、意外と華奢だったんだ。

忍

あの時は靴が。

蝮田

靴。

忍

いや、何でも。なんでうちに？ 姉ちゃんとは前から知り合い？

蝮田

お姉さんって？

忍

え、姉ちゃんに会いに来たんじゃないの？

蝮田

なぜ。あなたに会いに来たに決まってるでしょう。

忍

俺？ なんで？

蝮田

面白い面白い。しらばっくれるんじゃないわよ。

忍

ええっ。

蝮田

女だと思って甘く見ると血の雨が降るわよ。

忍

何言ってるの、何のことだか、さっぱり。

蝮田

そう。じゃあ言ってるあげる。はっきり、言ってるあげるわ。

忍

ああ。

蝮田

遅れています。

忍

へ？

蝮田 はつきり言います、遅れてます、三週間。

忍 ……

蝮田 三週間、遅れているんです！

忍・蝮田 ……

忍 それって、なにが。

蝮田 なにが？自分の胸に手え当てて考えてみなさいよ。

忍の手から論文と牛乳パックがこぼれ落ちる。

忍 それってどうなの？三週間遅れるとどうなの？三週間ってもう決定的なの？

蝮田 決定的っていうか、もう致命的。

忍 致命的。そんな、だって絶対に俺のせいだとは言い切れないだろう？

蝮田 ああ、責任逃れ？

忍 そんなじゃないけど、いきなり、そんなこと言われたって。

蝮田 いきなり？いきなりって言うの、あなた。大人なら、こうなることぐらい予想しておいたらどう？

忍 そう言うあんたにだって、責任の半分はあるだろう？

蝮田 冗談じゃないわ、自分のこと棚に上げて。まがりなりにも男なら、自分のやったことの後始末くらい、きっちり責任とってみたらどう？

忍、へなへなと座り込む。蝮田、忍に掌を差し出す。

蝮田 覚悟はできた？

忍 なに？

蝮田 いただくべきものは、いただかないとね。

忍 そういうことか。

蝮田 いただくまで帰るつもりはないから。

忍 ないよ。

蝮田 ない、じゃ困るの。

忍 ないものはないんだ。

蝮田 じゃあ何とかしなさいよ、今すぐ。座り込んでないで。

忍 どうしろって言うんだよ。

蝮田 今までこう、溜めたりとかしてないの？

忍 ないよ、全然。だいたい、俺まだ学生だし。

蝮田 え、卒業してなかったの。

忍 ああ、あれは嘘だよ、美容師やってるなんて。

蝮田 いえ、始めからそうは思っていないけど。

忍 やっぱり。そうか、見えないか、厚底履いてもダメか。

蝮田 何言ってるの。ああ、こんな無駄話してるヒマないの。今すぐ

何とかして。してくれないと：・

蝮田、三角倒立をしようとしてうづくまる。
忍、慌てて蝮田を抱き起こす。

忍 ばか、無茶するな。洗面所ならあっちだから。廊下の突き当た
り。変な仕掛けとかあるかもしれないけど。

蝮田 洗面所？

忍 駆け込んでいいから。駆け込むもんだろ、普通。

蝮田 別に今、行きたくは：・

忍 無理するのはやめてくれ、頼むから。何かあっても、俺、責任
とれないから。

蝮田 ：・確かに、休日出勤、続いたのよね。そんなに調子悪そう？
顔色、悪く見える？

忍 いや、どうだろ。

蝮田 ここ二ヶ月、休みがなかったから。

忍 忙しいんだな。看護婦って。

蝮田 は？からかわないで。

忍 え、違うの？じゃ、何、OL？

蝮田 あの時言わなかった？先々月からフリーになったの。

忍 フリーター？

蝮田 もう組織には頼らないことにしたの。あんな頭の古い爺いども
には付き合ってもらえないから。で、コネを頼りにくる仕事くる
仕事、片っ端から受けて、働きずくめ。

忍 大変なんだ、フリーター。

蝮田 大変ね。思ったより。会社勤めの方がある意味、気楽。だけど
私は今の方が楽しいからいいの。休みは当分取れないでしょう
けど。

忍 顔色、よくないかも。
 蝮田 じゃ、ちよつとお借りするわ。

蝮田、居間から出てトイレへ行く。
 忍、落ちた論文や牛乳パックを拾っている、
 入れ違いに縁と百子、居間へ入って来る。(縁は着替えている)

百子 あれ、いない。

縁 忍、ここにいた人は？

忍 トイレ。あつ、姉さんの友達じゃないよ。

縁 そう、そうなのよ。

百子 気づいた？

忍 うん、まあ。

縁 今日、私の友達が来るって言ったけど…

忍 ああ大丈夫。すぐに帰るから、あの人。心配しないで。

縁 は？

百子 あの人、誰か、わかってる？

忍 ちよつと言えない。悪いけど、少し二人で話させてくれないかな。

縁・百子 はあ？

太一郎、パンナコッタを食べながら居間へ入って来る。

太一郎

あ、姉ちゃん。何でもいいから何か作って。腹減って集中力がさ。モモ、お陰でいい作品、掘り出したよ。自分でも忘れてたけど面白いやつが押し入れに…

忍 兄貴。

太一郎 何だ、お前もいたのか。

忍 ちよつと、いいかな。

太一郎 何だよ、だから今、原稿をでっち上げなきゃいけないんだって…

忍 ……

太一郎 どうした？

忍 (口を開こうとし、縁と百子を伺う)

縁 なに？

忍 男同士で話していい？

百子 ええっ。

太一郎 じゃ、爺ちゃんここで話すか。

忍 いや、できれば二人だけで。

太一郎 気持ち悪いな。平気だよ、爺ちゃん、耳遠いからの。（祖父の部屋の襖を開けて）ちよつと入るよ。ああいよいよ、テレビ見えてて…

太一郎と忍、祖父の部屋へ入って行く。

縁 どうなってんの。

百子 わかんない。

縁と百子、襖に耳を当て、中の様子を伺う。
忍、襖を開けると縁と百子を睨み、再び襖を閉める。
すぐにテレビの音、大きくなる。

縁 （大声で）どうなったの？

百子 （大声で）ママシは？

真琴、居間へ入って来る。

真琴 （大声で）何、この音。お姉ちゃん、何処にいたの。さつきからずっと友達が。

縁 （大声で）あれは友達じゃないの。

真琴 （大声で）友達じゃない？

縁 （大声で）友達なんかじゃないの。

真琴 （大声で）ケンカしたの？

縁 （大声で）そうじゃない。最初から友達じゃないの。

真琴 （大声で）最初から友達なんていない？

縁 （大声で）いるわよ、友達くらい？

百子 （大声で）そうじゃないでしょ。

縁 （大声で）そうじゃなくないわよ。いるわよ、友達。

百子 （大声で）そういうことじゃなくて。あの人は、縁姉えの友達じゃなくて。

真琴 （大声で）ええっ違うの？じゃあ誰なの？

百子 （大声で）だから、あの人はお兄ちゃんの…

百子の台詞を遮って、蝮田、居間へ入って来る。

蝮田

(大声で)すごい音。何ですか、トイレのドア、ベタベタ。ベタベタ。コレってトリモチじゃないの。うわ、ベッタベタ。何かのワナですか？

真琴

(大声で)ごめんなさい。

百子

(大声で)こっちで洗って下さい。

百子、蝮田を台所へ連れて行く。
蝮田、流しで手を洗い始める。

縁

(大声で)だから、あの人は……

真琴

(大声で)ああもう、うるさいなあ。

真琴、祖父の部屋へ入って行く。
テレビの音、すぐに消える。
百子、台所から戻って来る。

縁

どうなってるの、何がどうなってるの、一体、私に友達はあるの？

百子

落ち着いて！(縁を叩く)あたしが何とかするから、お姉ちゃん、バス停に行つて、早く。

縁

だけど。

百子

早く。ここに相良さん来たら、あたしもう何が何だかわかんなくなる。絶対、家に連れて来ちゃダメだよ。

縁

わかった。頼んだわよ。

百子

うん。

縁、居間から走り出ていく。
祖父の部屋から神妙な顔をした太一郎・真琴・忍が出て来る。
無言で考え込んでいる三人。

百子

なに？

真琴

いいの、百子は。

太一郎

部屋行つてろ。

忍

俺……

太一郎

いいよ、黙ってる。今、考えるから。

真琴

どうする、父さんと母さん。話した方がいいよね？

太一郎 だけど、もう来てるんだろ。

真琴 台所。ほら、あの人。

太一郎 そんな女、見たくもない。(顔を背ける)

忍 やっぱり俺、何とかするから。

真琴 何とかってどうするのよ、どうかできるの。

太一郎 金か。

真琴 あるわけないでしょ、家に。お金なんて。

百子 ねえ。

太一郎 お前、貯金は？

真琴 少しなら。兄貴は？

太一郎 (ポケットをまさぐる)

真琴 いい。いい。

百子 ねえ。

太一郎 部屋行ってる。

百子 どうかしたの。

真琴 金目の物とか。

太一郎 金目の物か。

百子 (忍に) ねえってば。

忍 マリちゃんって本当に鋭いのかも。

百子 え？

忍 予知夢ってあるんだなあ。

太一郎 よし、待ってる。

忍 兄貴。

太一郎、居間から出て行く。
出て行った瞬間、蝮田、台所から顔を出す。

蝮田 石鹼小さくて泡立たないんだけど。大きいのない？

真琴 ない！

百子 あの、流しの下にきつと。

蝮田 下？

蝮田、再び台所へ戻る。

真琴 あんな女、放つときな。

百子 え、だけど。

真琴 ああもう塩まきたい気分だわ。

百子 だから一体なにがどうしたの？

真琴 なにが？あんたのザッシーに聞いたらどう？だいたい、何してんの、ザッシーは。こういうことが起きるのは、ザッシーにはわからないわけ？

百子 なに言ってるの。

真琴 大事なことには全然、役に立たないじゃない。あんたの受験だつて、そう。どこも受からなかったじゃない。

百子 そんなの関係ないでしょ。

真琴 関係なくないわよ、そんなの本当にいるの？なんで？この家、建売よ。まだ十年。何でそんなのがあるのよ？

百子 見えないからつてひどいよ。どうするの、聞いてたら……

真琴 聞けつーのよ。何処にいるの。ここ？ここ？

真琴、床の上をあちこち踏みつける。

百子 やめて。

真琴 ここか。ここか。

百子 やめてつて言ってるでしょ！

百子、真琴につかみかかる。

真琴 何よ、やる気？

百子 ばっかみたい。

真琴 なにが。

百子 ちよつと頭いいからつていい気になって。馬鹿じゃない。

真琴 馬鹿はあんたでしょうが。

百子 はい、そうです、馬鹿ですー。

真琴 わかつてんなら勉強してよ。最近、予備校さぼってるでしょ。知ってるんだからね。

百子 夏休みなんですー。

真琴 どこに夏休む予備校があるのよ。あれだって安金じゃないんだからね。

百子 真琴姉えが払ってるわけじゃないでしょ。

真琴 あんたが浪人したから、あたし奨学金とったのよ、頑張ってるよ。

百子 ご苦労様ですー。

真琴 あんた、いい加減にしないと…

忍 やめろよ。俺のことでケンカなんてしないでくれよ！

メール着信音。
百子、隅へ行ってパソコンを覗き込む。
忍、真琴にカレンダーを指し示す。
(日付けには縁の付けた丸がたくさん付いている)

忍 見ろよ。

真琴 なにこれ。

忍 模擬テスト。百子の。

真琴 え、こんなに。

忍 俺も驚いた。

真琴 ほとんど毎日じゃない。

忍 頑張ってるんだよ、あいつなりに。

真琴 こんな、体壊しちゃうよ。

忍 何かしてなきゃ落ち着かないんだろう。あるだろ、そういうこと。いろいろ悩んでるんだよ。悩まないはずがないだろう。

百子 (相良のメールを読んで) あああ、迷ってるう。

忍 迷え、お前はもっと迷っていい。

百子 (メールを読んで) 何処ですれ違っちゃったのかなあ。

真琴 そんなつもりは…

忍 いや、人生すれ違いだ、何もかも。

百子 (メールを読んで) もう、何でこう、うまくいかないのお。まったくだ。まったく、お前の言う通りだ。

真琴 百子。

百子 え？

真琴 言い過ぎたよ、ごめん。

百子 ……

太一郎（声） 忍。

原稿の入った封筒を手にした太一郎、居間へ入って来る。

太一郎 家で金になりそうなのは、これくらいだ。

真琴 これ、原稿。

忍 駄目だ、これ、渡さなきゃいけないんだろう？これから来る、何とかママシに……

太一郎 いいんだ、ほら。

忍 だけど。

太一郎 こんなの一つや二つ、書き溜めてあるに決まってるだろう。

忍 ……

太一郎 何処か、出版社に持ち込めば、ちよつとは金になるだろう。

蝮田が台所から出て来る直前、
電話が鳴る。
真琴、出ようとする。

太一郎 真琴。たぶん、俺だ。

太一郎、蝮田に背を向ける格好で電話を取る。

太一郎 （電話中）あ、親父。

蝮田、居間へ出て来る。

蝮田 もう手がガビガビ。ハンドクリームとかない？

真琴 ない！

百子 オロナインでいいですか。

蝮田、忍が手にした封筒をじっと見つめている。
忍、ゆっくりと封筒を差し出す。

忍 家で金になりそうなのはこれだけだ。

蝮田 これ。

忍 これを出版社に。

蝮田 （手早く封筒の中を覗いて）驚いた。

忍 乱暴にするな。

蝮田 ああごめん。なんだ、ちょっと見直した。

忍 何が。

蝮田 ちゃんと責任は取るんだ。

忍 もう行ってくれ。

蝮田 わかりました。またあとで連絡します。

忍 要らないよ、連絡なんて。

蝮田 聞きたくないの？これ（原稿）がどうだったか。

忍 いいから。行ってくれ。

蝮田 自信ありってこと。嫌いじゃないわ、そういうの。

忍 やめてくれ。あんたも、もっと自分大事にしなよ。俺が言えた義理じゃないけど。

蝮田 この仕事終わったら、休暇でも取るわ。

蝮田、居間から出て行く。
すぐに玄関が開いて、閉まる音。（蝮田が出て行った）
太一郎、電話を切る。

太一郎 親父、もう一泊するって。

忍 兄貴。

太一郎 契約まとまらなかったって。大変だよな。

忍 俺……

太一郎 いいって。メシにしよう。あれ、姉ちゃんは。

百子 コ、コンビニ。

太一郎 そうか。

真琴 何か作ろうか、ね、たまには。

忍 俺、丸紅さんに電話する。

太一郎 いい。

忍 だってこのままじゃ。

真琴 あんたはいいの。大人しくしてな。電話はあたしがするから。

太一郎 いいって。

真琴 父さんと母さんにも話さないと。

忍 うん。

真琴 あんた一人で話すとややこしくなるから、あたしを呼びな。

忍 真琴：・姉ちゃん。

真琴 やめてよ、くすぐったいじゃないの。

ゆっくりと玄関の開く音。

静まり返る四人。互いの顔を見交わす。

(太一郎・真琴・忍、蝮田が来たと思っっている)
(百子だけが相良だと思っっている)

真琴 マムシ？

百子 来ちゃったあ。

百子、慌てて見に行こうとする。

太一郎 いい。(玄関に向かって) 上がって下さい！

忍 兄貴。

太一郎 どうぞ、上がって下さい！

真琴・忍・百子、固唾を飲んで居間の入口を見つめる。
太一郎は入口に背を向け、緊張した面持ちで立っている。
やがて相良、ケーキの箱を手にし、地味なスーツ姿で入って来る。

百子 はああ。

忍 落ち着け。

百子 (独り言で) 普っ通だあー。

相良 ええと、こちら御殿場さんのお宅ですよね……って、上がっておいて何ですけど……

太一郎 え、男？(振り返る)

相良 表札が見当たらずで、表で戸惑ってしまっった。

縁(声) 百子。百子いる？

百子 お姉ちゃん。

縁(声) ねえ、メール来てない？どこかで行き違いになったみたい。

縁、居間へ駆け込んで来る。
相良と鉢合わせる縁。
しばし相良を眺め、気づいてよろめく縁。

百子 お姉ちゃん。

真琴 (縁に) 気をつけて、ママシよ。

相良 (逃げ惑って) どこ。どこ。

忍 (縁に) 早くこっちへ。

真琴 (縁に) 離れて。血の雨が降ってくる。

相良 (逃げ惑って) どこから。どこから。

太一郎 (相良に近づいて) あの…

忍 (太一郎に) 下がって。

相良 はいっ。

真琴 (太一郎に) 無茶しないで。

相良 はいっ。

真琴、相良の前に進み出て、じっと彼を睨みつける。

百子 あの、ちょっと。

真琴 いいから。ここはあたしにまかせて。

忍 無理すんな。

太一郎 真琴。

真琴 たまには、あたしにも何かさせて。

太一郎 いや、あのな。

相良 僕も何かできることがありますか？

真琴 さっきの兄貴、ちょっとだけ格好よかった。あたしにも一つくらい格好つけさせてよ。

太一郎 いや、それはいいんだけど。この人は…

真琴 (相良に) お願いします。

相良 はい、何をすれば…

真琴 このまま、今日は帰ってくれませんか。

縁 真琴。

真琴 (縁に) 大丈夫。(相良に) 何も聞かずに、今日のところは引き取りください。

縁、へたり込む。

忍 姉ちゃん。(縁を抱えて揺さぶる)

百子 あのあのあのあの。

相良 (百子を制して) それは納得できません。

真琴 納得して下さい。

相良 できません。せっかくここまで来て、会った途端、そんなこと言われて。傷つきますよ、僕だって。

真琴 いいから帰って下さい。

相良 帰れません。

忍 そんなに俺たちを苦しめて楽しいか？

相良 ええっ。

太一郎 待て。

真琴 下がってて。

太一郎 ちよっと待って。お前たちさ、問題はそういうことじゃない気がするんだよ。

百子 (救いを求めるように) お兄ちゃん。

太一郎 あんた。

相良 はい。

太一郎 ケーキは斜めに持ちっちゃ駄目でしょう。

へたり込む百子。

忍 百子。

相良 大丈夫です。ケーキじゃないので。マドレーヌです。

太一郎 マドレーヌ？

相良 僕が焼いたんですけど、今朝。(箱を開けて見せる)

太一郎 (覗いて) ほう。

忍 (へたり込んだままの百子に) どうした？

真琴 マムシのせい？

相良 ちよっと牛乳入れすぎたみたいなんですけど。

太一郎 ほうほうほう。(マドレーヌをもらって食べる)

忍 気をつける、畏だ。

真琴 だめ。

太一郎 うまい。

真琴 何て姑息な手を。

忍 バクバク食ってるよ。

相良 良かった。変な形にしたので食べにくいかなって。

太一郎 うまい。

忍、立ち上がり、相良に向かって行く。

真琴 忍。

相良 ほら、丸いのばつかだつまんないでしょう……

忍 俺が行く。

相良 かと言って三角だと、ただのスポンジケーキみたいですし……

忍 ちよつと、あんた。

相良 だから、ほら、テルテル坊主。

忍 ぜんぼうこうえんふん……

忍、ゆっくりと失神。

真琴 忍。

太一郎 もう一個、いい？

相良 どうぞ。子供たちにも時々、焼いているんです、おやつ時間に。調理師免許も持っているの。

太一郎 はあ、子供？

相良 子供は反応が素直ですから。ちよつとまずいともう駄目で。
(真琴に) どうですか、一つ。

真琴 その手にはのらないわよ。

相良 (笑って) いやだなあ、お菓子で気を惹こうなんて思っていますよ……縁さん。

真琴 (激しく動揺して) お姉ちゃんに間違えられた……

相良 えっ、縁さんじゃない？ (縁と百子を見比べる)

太一郎 爺ちゃんにもあげていい？ (箱ごと受け取る)

相良 どうぞ。

真琴 うまいわ、兄貴。あっちから逃げて。

太一郎 あ？

太一郎、部屋に入る。
真琴、縁と百子を引き寄せて、相良の前に立ち塞がる。

相良 あの、縁さんは…

真琴 (縁と百子に) いい？ ここが正念場よ。

真琴たちと相良、互いに牽制しあい、グルグルと部屋の中を回る。
やがて相良、足を止め、正座をすると、

相良 …やはり図々しいですよ。お会いしたこともないのに、いきなり、お宅にお邪魔するなんて。

縁・真琴・百子 えっ。

相良 でも、どうしても気持ちを抑えられなくなってしまっ…一目でもいいから、お会いしたいと。非常識な男とお思いでしょう、でも決して、決して軽はずみな気持ちで伺ったわけではありません、それだけは信じてください。

深々と土下座をする。

縁 相良さん…

真琴 ん？

忍、ハッと目を覚ます。相良の土下座を見て、

忍 三角倒立！

真琴・相良 えっ。

忍 危ない！

真琴 きゃああ。

相良 何？ どこ？ どこから何？

忍 よけて！（伏せる）

真琴 きゃああ。

真琴、縁を盾にして押し出し、伏せる。
よろめく縁。受け止める相良。

相良 …ユカリーナ？

縁 …はい。

真琴・忍　へっ？

縁　きやつ。

縁、相良を突き飛ばす。

縁　どうしよう、百子。

百子　ええと、ええと、裏庭、行つて。

縁　裏庭？

百子　ほら、花、見せれば。花。

縁　ああ。

相良　お花ですか。

百子　早く。

縁　ええ、はい、お花。

相良　へえ。どんな。

縁　私がヒマワリだった頃にもらつてきた小学生。

相良　ええっ。

縁　満開なの。

相良　それはすごい。

百子、追いやるようにして二人を居間から出す。
すぐに縁だけ戻つて来ると、百子を部屋の隅に連れて行く。

縁　サービスにメールしといて。お付き合いOKって。

百子　ええっ。

縁　早く。今すぐ。三人にはバレないように。

百子　なんで。もういいじゃん。

縁　まだダメ。バレたら貸してる三千円、三万にするからね。

百子　そんな。

縁、居間を駆け出して行く。それを見送る真琴・忍。
太一郎、祖父部屋から出て来る。

太一郎　（唐突に）で、あれは誰？

真琴・忍　ええっ。

真琴 誰って。

忍 マムシだろ、原稿取りに来た。

太一郎 はあ？ 違うよ、全然。

真琴・忍 ええっ。

太一郎 蝮田、女だし。

真琴・忍 ええっ。

忍 それじゃあ。

真琴 あの人は誰？

太一郎 何だ、お前ら、知らないのか。

忍・真琴、首を振る。

太一郎 じゃ俺は誰のマドレーヌを食ったんだよ。爺ちゃんも。

忍 もしかして、あれが友達とか？

真琴 お姉ちゃんのこと？まさか。

忍 まさかね。

真琴 あの会社、若い女とおっさんしかいないし。

太一郎 だろ。そんなことあるわけないだろう。(百子に)なあ。

百子 (メールを書くのに夢中)え、なに。

太一郎 何って、さっきの人。姉ちゃんの友達じゃないよなあ。

百子 ー。

真琴 百子。

百子 う、うん、知らない知らない。

忍 なんかも、お前変だぞ。

百子 うそ。

真琴 なにか隠してる。

百子 隠してなんか。

太一郎 じゃ、さっきのは誰だ？

百子 知らない人。

忍 目を逸らすな。

太一郎 モモ、兄ちゃんには言えるよな。

百子 三万円くれるんなら、言う。

真琴・忍 百子。

太一郎 いつからそんな子になった。

百子 だって。だって。

太一郎 兄ちゃんは悲しい。

百子 だって三万とるって言ったら、絶対とるんだもん。

真琴 ねえ、それ。(パソコンを示す)お姉ちゃんのですよ。何であんたが覗いてんの？

百子 え。

忍 そういや姉ちゃん、最近よくメールしてるよな。

太一郎 メール。そういや今日もずっと……

太一郎・真琴・忍、パソコンに駆け寄ろうとする。
百子、立ち塞がる。しばし、睨みあう四人。

百子 もしかして、みんなが騒いでるのって、さっきの男の人のこと？

真琴 何言ってるの。

忍 そうだよ。

太一郎 それしかないだろう。

百子 ああつ。じゃあ、みんなにも見えたんだ。

三人 はあ？

百子 なんだあ。何のことで騒いでるんだろって思った。何言ってるの、みんな、あれ、ザッシーじゃない。

三人 ええつ。

百子 よかった、みんなにも見えるようになったんだ。

真琴 ちよつと待ってよ。

忍 そうだよ、だってスーツ着てた。

太一郎 マドレーヌ焼いたって。

百子 そう、スーツ。ザッシー、時々はスーツだよ。

三人 ええつ。

百子 昨日、縁姉えも突然ザッシーが見えるようになった。

太一郎 姉ちゃんが。

百子 そのお祝いにザッシーがお菓子焼いて。

真琴 嘘つくのもいい加減にして。大体そんなもん、いるわけないじゃない。

太一郎 待て。奴は牛乳を大目に入れたと言ってた。俺のためか。

忍 じゃあ、あの形にしたのも。

太一郎 お前を元気づけるためか。

真琴 そんなことあるはずないじゃない。

忍 前から百子にだけ見えるなんておかしいと思ってたんだ。

太一郎 俺たちに見えてもおかしくない。兄妹だしな。

真琴 見えてるほうがおかしいの。

太一郎 真琴、理系人間のお前には受け入れ難いかもしれない。が、お前が見たもの、それが真実だ。

真琴 あんなの、よれよれのスーツ着た、ただの地味な人じゃない。

太一郎・忍 おお。

忍 同じだ、やっぱり同じものが見えてる。

太一郎 間違いないな。ああ、あれがザッシー。

真琴 だから：：

太一郎 どうして信じられないんだ。いいか、今までモモが嘘をついたことがあるか？

家の奥からドタドタと物音。(相良がトリックに掛かった音)

真琴 なに？

忍 この音。

太一郎 あっ。

百子 もしかして。

太一郎 裏庭に仕掛けたトリックが。

真琴 どうして裏庭に。

百子 密室でも何でもないじゃない。

忍 まさかザッシーが？

真琴 どんなの仕掛けたの。

太一郎 (考え込む)

百子 覚えててよ。

太一郎 どうせ引つ掛かるの、忍だけだと思ってたし。

忍 何だよそれ。

百子 相良さ：・サガ、サガサガ、サガさなきや、ザッシー。

百子、居間から出ようとする、縁と相良の音がする。

相良（声） あたっ、いだだだだ：・

縁（声） 大丈夫ですか。

相良（声） あだだだだ：・

相良、首にロープを巻きつけ、辛そうに入ってくる。
慌てる太一郎・真琴・忍。

相良 いたた：・小指、ぶつつけちゃいました。

縁 ごめんなさい、玄関の角、出てるんです。削っておきます。

相良 ええと、きれいでした、ヒマワリ。いいんですか、タネ、こんなにもらっちゃって。

縁 はい、たくさんあるので。

相良 明日、子供たちにも配ります。喜ぶなあ、きっと。

縁 子供たちからヒマワリが生えちゃうね。なんて。

相良 またそんな、可愛いこと言って。

真琴 （相良を見て）ビクともしてない。

忍 すごい。

太一郎 これは間違いないな。

相良 はい？

太一郎 本物だ。

相良 はい？

太一郎 真琴、上着を。

真琴 あ、うん。（ハンガーを取りに行く）

太一郎 忍、麦茶。

忍 うん。（麦茶を入れに台所へ）

太一郎 モモ、座布団だ。

百子 う、うん。

相良 どうぞお構いなく。

太一郎 いえいえ、そういうわけには。

相良、上着を脱ごうとしてロープに気づく。

相良 あれ、蜘蛛の巣かと思ってたらロープでした。どうりで苦しいはずだ。

縁 これ。

太一郎 申し訳ない。ケガはないですか。

相良 ケガ？なんですか？してませんよ。

真琴 すごいかも。

太一郎 姉ちゃんも、ほら座って。

縁 (百子に) ちよつと。

縁、百子を部屋の隅に連れて行く。

縁 しゃべったわね。

百子 ううん。

縁 だって変じゃない。

太一郎・真琴・忍・相良、正座をしている。

太一郎 ほら、姉ちゃん。

相良 (麦茶見せて) いただきます。

百子 お姉ちゃんが言うなって言うから。

縁 言うから？

百子 だから。

縁 だから？

百子 (笑顔で) ザッシーって言つといた。

縁 は？

百子 相良さんのこと、ザッシーってことにしといたから。三千円、チャラね。

百子、座る。仕方なく、縁もそれに続く。

相良　うまい。やっぱり麦茶ですよね。いや、普段着馴れないものを着たので、暑くて暑くて。

太一郎　ああ、普段はこういう格好じゃなくて。

相良　ええ、もっと動きやすい格好で。子供相手ですから。

真琴　子供。

太一郎　今でも子供と遊ぶんですか。

相良　それが仕事みたいなものですから。

忍　仕事なんだ。

太一郎　で、やっぱり、一人増えてるとか言われるんですか。

相良　は？

縁　何でもないです。

相良　そんな、一人増えてたら大変ですよ。減ってるほうが大変ですけど。責任問題ですから。

忍　責任、あるんですか。

相良　当たり前じゃないですか。親御さんからお預かりしてる大事なお子さんですから。プロ意識をもってやらないと。

真琴　プロ。

太一郎　家を出る時ってどんな気持ちなんですか。

相良　は？

縁　失礼よ。

相良　すみません、質問の意味がちよっと。

太一郎　いえ、家を出る時っていうのは、どのへんで見切りをつけるものなんですか。何かキツカケとかあるんですかね。

相良　ああ、家を出たことがない？

太一郎　僕ですか？　僕はないですけど。

相良　僕も。ずっと同じ家にいるんで。

真琴　ああ…

忍　その前とか、別のところにいたとかは？

相良　ないですね。ずっと同じですね。

忍　そうなんですか。

真琴　知らなかったね。

太一郎　まさか、出て行く予定とか、ないですよ？

相良 ええっ！ いや、いきなりそんな、縁さんと……？

忍 縁姉ちゃんと？

真琴 出て行くって？

太一郎 なんて？

縁 なんてって、その……

相良 すみません、また僕ひとりで先走ってしまつて。いえ、今後、そうなる可能性も視野に入れてというお話でして……

忍 百子は知ってたのか、この話？

百子 す、少しだけ？

太一郎 なんで早く言わないんだ。

真琴 まずいよ、出て行かれた家は不幸になるって言わない？

忍 ああ、没落したとか。

真琴 そうそう、一家全滅とか。

相良 全滅？

太一郎、相良に手を合わせる。

太一郎 どうか出て行かないでください、考え直してください。

相良 ……（縁に）婿に入れということですか？

縁 いえ……

百子 それより、縁姉えのこと。

縁 百子。

百子 お姉ちゃんのこと、訊こうよ。

真琴 そうね。それ訊いとかないとね。

太一郎 会社のこと？

真琴 違う違う。結婚。あ、タブー言っちゃった。

忍 なに？

百子 なんでもない、なんでもない。

縁 いいわよ、そんなこと。

忍 訊いておきなよ。この際だし。

縁 だけど……

相良 僕もその話をしに来たわけですから。

太一郎 どうなんですかね。ここだけの話、姉ちゃん、こんななんですけど。結婚とか、そういうの、どうなんですかね？

全員 ……

相良 かなり前向きです。僕の中では。

全員 おお：・

太一郎 いいお告げだ。

相良 はい？

太一郎・真琴・忍、拝む。相良も拝み返す。
電話が鳴る。真琴が出る。

真琴 (電話中) はい。あ、なんだ。え、もらったひやむぎ？ねえ、ひやむぎって何処？

縁 誰？

真琴 お母さん。道明寺さん家でお昼いただくって。で、ひやむぎ持ってきて来てって。

縁 こっちに。(立とうとする)

真琴 いいよ。(太一郎に)取って来て、裏庭から手渡してくれない？

太一郎 俺？

真琴 あたしじゃ裏の塀、届かないの。一番、体の長い人がやって。

太一郎 なんだよ、もう。何処。

縁 棚の上。

太一郎、台所へ行き、箱を持って居間を出て行く。

真琴 (電話中) じゃ兄貴が裏から渡すから。じゃね。(切る)

相良 お出かけ中ですか。

忍 帰って来いって言えばよかったのに。せっかく…(相良を見る)

真琴 あ、そうか。

相良 いえ、また日を改めて。

忍 母には見えるんですか？

相良 え？

忍 そういうの、自分ではわからない？

相良 ええと、何が？

百子 麦茶、もう一杯いかがです？

相良 いいですか？

百子 はい。ちよつと二人も来てくれない？

真琴 なんです。

百子 一人じゃ持てないから。

忍 ええ？

百子 真琴姉えも。お願い。いいから。

真琴 なによ。

真琴・忍・百子、台所へ。

縁 うるさくてごめんなさい。

相良 いや、うちの方が。

縁 ああ、ご兄妹多いんですよね、相良さんも。

相良、電話台に置いてある壺に気づいて立つ。

相良 うちはどうしようもない奴ばかりで。

縁 そんな、うちのほうがどうしようもないです。

相良、壺を撫でながら、

相良 背の高い彼ですか？作家っていうのは。

縁 はあ。

相良 すごいなあ。いいなあ。

縁 よっぽど相良さんのほうが文章は上手です。メールとか……

相良 またまた。いつも長くなっちゃって。学生の頃、僕も少し書いてたもので、つい。縁さんこそ、いつも素朴なメールで……あ、いいですね、これ、とつても。

縁 お好きですか。

相良 ええ、こう重みのある物が。こういうのが並んでいる家にしたいなあって思うんです。

縁 いいですね、そんなお家。

二人、見つめて照れ合う。
台所で真琴・忍・百子、麦茶の用意をしている。

真琴　ほら、行くわよ。

百子　待って、お願い、待って。

忍　なんだよ。

百子　：もう話していいかなあ？

真琴・忍　はあ？

台所で三人、しゃがんで話し出す。

相良　ええと、最近ポストペット変わりましたよね？

縁　あ、はい：：

相良　ガガンボちゃん。

縁　ババンビです。

相良　そうそう、いやあボブもあなたのところですぐ遊びに行ってしまうって。なかなか帰って来ないですよ。よっぽど居心地がいいんでしょうね。いやあ僕がポストペットになりたくらいで：：

二人、見つめて照れ合う。
真琴・忍・百子、台所の窓から顔を出して、

忍　（裏庭の方へ）兄貴、兄貴。

真琴　ここからじゃ聞こえないって。

百子　内緒ね、あたしが言ったって、内緒ね。

真琴　何でもっと早く言わなかったの。

百子　だって、だって。

忍　兄貴ー。

真琴　早く教えなきゃ。

忍　ああ。

三人、台所から出て来て、見つめ合う二人を見る。
そうっと居間から出て行こうとする三人。

縁　（三人に気づいて）なに？麦茶は？

三人、相良へ曖昧に笑いかけ、そのまま出て行く。

相良 ええと、今の妹さんと弟さんは……

縁 すぐ下の妹が真琴といつて、まだ学生なんですけど……

相良 ああ、大学院生の。ええと、専門は何ですか？

縁 ええと……

相良 待つて下さい。言わないで。当ててみせましょう。

縁 えっ。

相良 僕が推理します。勘はいいんですよ。(考えて) そうですね、文系か理系かと言えば、理系。今、ベ切の迫ったレポート、もしくは論文を抱えていてかなり焦っている。まあもちろんパソコンも使えるんですけど、考えをまとめるまでは手で書いていくタイプ。違いますか。

縁 そうです、当たってます。

相良 当たりました？

縁 すごい、すごいですね。

相良 驚きました？

縁 どうしてわかるんですか。

相良 聞きたい？

縁 教えて。教えて下さい。

相良 いやあ簡単なことです。さっき上着を渡す時、真琴さんのこの辺(手首あたり)に文字が写ってたんです。インクが乾かないうちに触ったんでしょね。数学か物理の記号のようないだから理系かな、と。で、ペンか何かで書いてるんだな、と。

縁 なんだ、そうなんですか。でも論文のベ切が近いというのは？

相良 廊下でこれを見つけたんです。(ポケットから紙切れを出す)

縁 いやだ、トイレットペーパー。

相良 ほら、ここにも記号が。

縁 ごめんなさい、こんなの、恥ずかしい。

相良 いえいえ。つまり、トイレでこんなメモをしてしまうほどという事ですから、かなり追い立てられているのかなって。

縁 はああ、すごいですね、相良さんって。

相良 いやいや、別に大したことは。

照れながら見つめ合う二人。

縁 あ、甘い物好きですか。

相良 はい、あ、でもお構いなく……

縁 ちょっと待ってて下さい。ここに頂きもののお菓子が……

縁、棚から菓子箱を取ろうとする。
その途端、ひまわりの種が大量に降って来る。
最後にバケツが落ちて来て、縁の頭に被さる。

縁 たいちろう……

相良 大丈夫ですか？

縁 何でもありません、大丈夫です。

縁、頭にバケツを被ったまま、相良の横に座る。

相良 ユカリーナ。

縁 何でもないです、何でもないです。(菓子箱を出す) どうぞ。

相良 ああどうも、でも、それバケツ……

縁 え、あ、これ帽子です。どうぞ、おいしいんですよ、これ。

相良 ……本当に大丈夫なんですか？

縁 何ですか、何か変ですか、私、変ですか。

相良 いいえ、変なんかじゃありません。素敵だ。

縁 相良さん……

相良 僕にも被らせてもらえませんか。

縁 どうぞ。

縁、相良にバケツを被らせる。

相良 ……変ですか？

縁 素敵です。

二人、見つめ合う。
太一郎、拾った蝮田の眼鏡を持って居間へ入って来る。
同時にメール着信音。太一郎、それに気づかない。
相良と見つめ合っていた縁、それに気づかない。

太一郎 あっ。

縁 あっ。

太一郎 これ。

相良 どうしました？

縁 たぶん、サービスからの返事。

太一郎 姉ちゃん。

縁 太一郎、あのね。

太一郎 これ何、姉ちゃん。

縁 見ちゃった？

太一郎 なんで黙ってたの。

縁 黙ってるつもりはなかったの。でも恥ずかしいでしょ。

太一郎 そうだよな、照れくさいよな、なかなか言えないよな。

縁 そうなの。言わなきゃとは思ってたんだけど。

太一郎 もっと早く教えてほしかった。

縁 ごめん。

太一郎 姉弟なんだから。

縁 太一郎。

太一郎 だって水臭いじゃないか、まさか姉ちゃんが：ポストペットに俺の名前つけてるなんて。

縁 ……

太一郎 （嬉しそうに）ピンクの象。

縁 ……

太一郎 ピンク・エレファント・タイチロウ。

縁 （棒読みで）可愛いでしょー？

太一郎 すっげえ可愛い。

真琴、居間へ入って来る。

真琴 あ、兄貴。（廊下へ）いたよ。

縁 死ね。死ね。（ポストペットをクリックしている）

相良 縁さん？

忍・百子、入って来る。

百子 お兄ちゃん。

忍 いたいた、何処にいたんだよ。

太一郎 何だよ。麦茶入れてよ。

真琴 それどころじゃないの。

忍 ちよっと、ちよっと。(引っ張っていく)

太一郎・真琴・忍・百子、部屋の隅へ行く。それに気づかない縁と相良。

相良 死にますよ、縁さん、象、死にます。

縁 いいんです、止めないで。

太一郎 なに。

真琴 落ち着いて聞いて。

太一郎 落ち着いてるって。

忍 びっくりするかもしれないけど。

太一郎 麦茶が切れたのか。

忍 聞いてくれよ。

真琴 お姉ちゃんね、本気で結婚しようとしてる。

太一郎 えっ。

真琴 結婚情報サービスってわかる？登録すると希望どおりの人を紹介してくれる…

太一郎 本屋の袋によくハガキが入ってる？

百子 それそれ。

真琴 そこに入会したの。

太一郎 姉ちゃんが？(縁を見る)

相良 縁さん、それ、象じゃない、ボブです、ボブ！

縁 ああっ。いつのまに入れ替わったの。

相良 ボブ。ええい、ボブの仇。(クリックする)

太一郎 寒気が。

忍 で、そのサービスで紹介された相手が…

太一郎 なに、もう紹介されたのか。

百子 そう。紹介されたどころか…

太一郎 どころか。

真琴　もう家に：・

太一郎　もう家に来るかもしれない？なんでそれを早く言わないんだ、姉ちゃん。

縁　きゃっ、いたの？

太一郎　何やってんだよ、ザッシーと遊んでる場合じゃないだろ。

縁　えっ。

相良　ザッシー？

百子　ええと、パソコンの名前です。それ。

相良　ああ。

太一郎　早く歓迎の準備しないと。もう来るかもしれないだろ。

真琴　あのね、兄貴。

縁　来るって？

太一郎　もうしらばっくれなくていいよ。俺、聞いたんだ。

百子　いや、ちゃんと聞いてない。

忍　兄貴、最後までちゃんと聞いてくれ。

縁　なんのこと？

太一郎　俺は歓迎したいんだ。

縁　（キョトンと兄弟姉妹を見廻す）

忍　百子は何も喋ってないって。

縁　あっ喋ったんだ。三万、三万よ、あんた三万。

百子　言っていない、言っていない。

真琴　問題はそこじゃないの。だから兄貴、聞いて：・

太一郎　そうだ、問題は麦茶がないってことだ。

忍　違うんだよお。

太一郎　じゃあ、客が来るのにどうするんだ。

縁　一体、何て言ったの、百子。

百子　あたしはちゃんと話したの。

縁　やっぱり言ったんじゃない。三万、出しなさい、三万。

百子　だって、だって。

真琴　（相良を見て）みっともないよ。

相良　お客様がいらっしやるんですか。

太一郎 ザッシー、あんた麦茶買って来てくれない？

相良 は？

百子 (パソコンを掲げ、腹話術のように) うん、わかったなりー。すぐ買ってくるなりー。

縁 たいちろう。

太一郎 なに。

縁 あんたとは一度ちゃんと話さないと思って思ってたのよ。

太一郎 待ってたんだよ、その言葉を。何でも相談してよ、姉ちゃん。

縁 (相良に) ちよっと待っててもらっていいですか？

相良 歓迎の準備ですか。で、どなたが？

太一郎 俺たちの新しい兄弟だ。

相良 え、まだ兄弟がいるんですか。

太一郎 あんたも祝ってくれ、ザッシー。

百子 よかったなりー。おめでとうなりー。

太一郎 そうだ、マドレーヌ焼いてくれ。

相良 えっ、今？

太一郎 今、焼かないで、いつ焼くんだよ。

相良 あ、はい。

太一郎 よし、オッケー。あと、なに準備すればいいかな、姉ちゃん。もう何でも相談してくれよ：あれ？

縁、電話をかけている。

縁 丸紅さんですか。太一郎の姉ですけど、大至急、三角倒立のママシを、一ダース寄越してください。

太一郎 えーっ。ちよっとちよっと。

太一郎、受話器を奪おうとする。抵抗する縁。

太一郎 なに、いきなりそんなこと。

縁 三角じゃなくてもなんでもいいです、今すぐ寄越して……えっ？

太一郎 なに？

縁 まさか。

太一郎　なに？　なに？

縁　　：・・マムシ、さつき一度、原稿を持って帰って来たって。

太一郎　は？

縁　　それでまた、うちへ向かったって。

太一郎　はあ！？

床下からガタガタと物音が響く。

蝮田（声）　きゃあああ。なにこれなにこれ。

床の抜け穴から蝮田、出て来る。

五人　　（蝮田を見て）ああつ。

蝮田　　（五人を見て）ああつ。

忍　　どうして戻って来たんだ。

蝮田　　眼鏡、落としたままだったから。

百子　　なんでこんなところ？

蝮田　　すみません、お庭で探していたらいつのまにか、こんな床下に。で、いきなり何かがこう飛び掛ってきて……

縁　　ステキチ？

蝮田　　あつ、いた、こいつ。

蝮田、お爺ちゃんを引っ張り出す。

兄弟姉妹　お爺ちゃん！

お爺ちゃん、慌てて穴の中へ消える。

縁　　あつ、逃げた。

百子　　（祖父部屋の襖を開け）あつ戻って来た。布団の下から。

真琴　　早っ。

蝮田　　え、さっきの生物は。

百子　　ごめんなさい。本当にごめんなさい。

太一郎　ああ、最大の密室トリックがばれた……

縁　　お爺ちゃんをトリックに使わないで。（部屋に向かって）お爺

ちゃんも引き受けないの、年なんだから！

お爺ちゃん、台所から出て来る。

お爺ちゃん 孫に頼まれたら、断れん。

縁 えっ、そっち？

お爺ちゃん、廊下へ去る。

太一郎 抜け穴はひとつとは限らない。

縁 いくつ掘ったの！

百子 あがってください、大丈夫ですか？

皆で蝮田を引っ張りあげる。

相良 あの、こちらの方は？

縁 えーと……

真琴 すみませんけど、今、いろいろ立て込んでるんで、眼鏡を探したら、さっさと帰ってもらえますか。

蝮田 それが見つからなくて……でも、お話したいこともあったので、ちようどいいです。

忍 もういいだろう。

蝮田 よくないわよ。これ（原稿）のことです。

忍 何だよ、それじゃ納得いかないのか。

蝮田 いえ……

忍 金にならないっていうのか。

蝮田 いえ、そうじゃなくて……

太一郎 蝮田さん？

真琴・忍 ええっ。

蝮田 なに？

真琴・忍 ええっ。

太一郎 何だよ、言ったろ、三角倒立の蝮田って。

蝮田 ええと……（目を細めて太一郎を眺める）

縁 眼鏡、なかったんですか。

蝮田 ええ。

太一郎 こんなんでよければ。(ポケットから眼鏡を出す)

蝮田 (眼鏡を掛けて) うわっ伸びた。これ、私の眼鏡。

太一郎 まさか、庭に落ちてたやつです。

蝮田 庭に落ちてたから私のでしょうか？

太一郎 ん？

真琴・忍 んんん？

忍 じゃあ、つまり、俺は……

真琴 忍。

忍 兄貴の担当に手を出しちゃったのか……

蝮田 良かった。探しておいてくれたの？ 優しいのね。また会えて嬉しいわ。

太一郎 負けましたよ……噂通りの怖い人だ……爺ちゃんをかいくぐって、うちに侵入してくるなんて……

蝮田 何を今さら。私はもうすっかり、あなたのファンよ。御殿場太一郎。

相良 ……太一郎？

蝮田、原稿を差し出す。皆、覗き込む。

縁 あんた、書けたの？

太一郎 えっ。

相良 ほう、プロの原稿なんて初めてです。

太一郎 ちよつとちよつと、待って下さいよ。これ、どこで手に入れたんですか。

蝮田 は？ ちよつと褒めたからってふざけないで。

太一郎 だって、これ、俺の作品。

蝮田 どうとう言ったわね、堂々と俺の作品と言えるレベルってことね。嫌いじゃないわ、そういうの。と言うかむしろ、好き。

太一郎 え、どういうことだ。じゃ、さっきこれを渡した相手は……忍。

真琴と忍、真実に気づき、抱き合って「良かった」と言いつつ号泣。二人、太一郎にも抱きつく。

太一郎 なんなんだよ。なんなの。

真琴 まだわからないの。

太一郎 なにが。わかんないよ。

真琴 なんでわからないのかが、わからない。(号泣)

忍 もういい、わからなくていい。(号泣)

太一郎 どうしてこの原稿がここに……あなた、一体、どんなトリックを使ったんだ？

蝮田 そう、それ。その決め台詞にガッンと来たのよ。探偵がまだ見ぬ犯人に向かって呟く、その台詞……「あなた一体、どんなトリックを使ったんだ？」。すると、心の中の犯人はいつもこう答える。

相良 「教えてあげない」。

蝮田 そう。

縁 え？

蝮田 よくわかったわね。

相良 いえ、勘です……

蝮田 でも、この並行して進んでいくサイドストーリー、これがまたとてもいいわ。

相良 サイドストーリー。

蝮田 主人公が趣味で書いている推理小説、これがうまく挟み込まれている。綿密に計算された完全密室の連続殺人、それがあつとという間に失敗していくスピーディーな展開、自殺するはずだった犯人も死ぬのを諦め、何もなかったことにして家に帰って寝てしまうという……

相良 『だけど誰もいなくならなかった？』

蝮田 そう、その通り。

相良 冒頭はこうじゃないですか。「秋茄子は嫁に食わずな」。

蝮田 その通り。その通りだわ。

相良 それ、僕のだ。たしか高校の時、盗まれた僕の作品です。

全員 ええっ。

相良 どうして、あなたがそれを？

蝮田 どうしてって……

縁 盗まれた作品？

太一郎 まさか。

百子 ドンキー？

太一郎・相良 うわあっ。

百子 桃色ゴーストライター？

太一郎・相良 うわあーっ。

縁 太一郎？

相良 太一郎。御殿場、太一郎……

忍 ゴーストライター、って何だっけ。

真琴 ああ、あれじゃない、交換日記の。高校の時だっけ。

縁 そんな……

互いを見つめる、太一郎と相良。

太一郎 ……あんた、相良不見夫？

相良 本当に、あの御殿場なのか。

太一郎 ドンキー？

相良 その呼び方はやめてくれ。

太一郎 あんた、いつから妖怪になったんだ。

相良 ええっ。

太一郎 ずっと俺のことを監視してたのか。フロとかトイレとかも覗いてたのか。

相良 は？

（太一郎を叩いて）落ち着いて！ よく見てよ、お兄ちゃん、どこからどう見たって相良さんは普通の人間でしょ。

太一郎 ええっ、だって、お前が……

忍 兄貴、ちゃんと聞いてくれ。

真琴 紹介相手。お姉ちゃんの。

太一郎 えっ。

忍 さっき言ったろ、結婚情報サービスのこと。

太一郎 えっ。

百子 うちに来る紹介相手っていうのが、相良さんなの。

太一郎 ええーっ。

真琴 お姉ちゃんと結婚するかもしれないってこと。

忍 そう。

太一郎 だってあいつ、ドンキーだよ？ ゴーストライターやるような

やっだよ？ 駄目、駄目駄目、姉ちゃん、絶対駄目！
 まさか、縁さんの弟がお前だったなんて。それに、俺の作品を盗んだのも。
 蝮田 待つて。つまり、これは盗作っていうこと？
 相良 そうです：：これも：：これも：：全部、僕の作品です。
 蝮田 なんですすって。
 縁 本当に、相良さんがドンキーなんですか。
 相良 不本意ながら、そう呼ばれたこともありました。
 縁 信じられませんが、弟から聞いていたドンキーは、もっと小賢しくて、身勝手で、器の小さいやつでした。
 相良 はっきり言われると傷つきます。昔から、好きになってしまおうと、後先かえりみず突っ走ってしまうんです、お恥ずかしい。
 太一郎 あの後、サオリさんとはどうなったんだ。結婚情報サービスに入ったってことは、ふられたってことか。
 相良 もういいだろう。
 太一郎 よくない。
 相良 聞きたいのか。
 太一郎 ああ。
 相良 ：：（縁を伺う）
 縁 聞かせてください。
 相良 ずいぶん古い話に戻るけど。俺とサオリが三年、お前はまた一年だったな。
 太一郎 ああ。
 相良 確かに俺は交換日記のゴーストライターになってお前を騙したよ。返事が来ないといって落ち込むであらうサオリにつけ込んだで、俺だけに心を開いてもらうはずだったんだ。相談相手から恋人へ。恋愛の黄金パターンだ。
 太一郎 はずだった？
 相良 ああ。サオリは落ち込まなかったんだよ。お前から返事が届かなくて。進路のことで手一杯で、お前どころじゃなかったんだな。
 太一郎 あの時、俺は書いたんだよ、いろいろ。進路のこととかよくわかんなかったけど、彼女のことを励まそうと思つて。
 相良 全部、読んだ。俺が励まされた。すごく。
 太一郎 あんたの悩みに答えてたのかよ。
 相良 なかなかいいこと書いていたよ。

ポケットからノートを出す。

太一郎 ああっ、それ。

相良 「あなたの人生列車の乗客はあなた一人です」。

太一郎 なんで持つてるんだ。

相良 「どの駅で途中下車しても、たとえ急に思い立って乗り換えをしても」……

太一郎 やめろっ。

相良 「終着駅で僕は必ず待っているでしょう」

太一郎 勘弁してくれえ。

百子 ある意味、彼女に届かなくて良かった。

相良 その言葉に励まされた俺は、

全員 ええっ。

相良 俺は決心した。サオリとともに人生を歩もうと。同じ大学へ進み、同じように保育士の資格を取り、いろいろ汚い金も使い、何とか同じ保育園へ潜り込むことができた。

忍 できたんだ。

相良 二人の仲は順風満帆に思えた。年取った保母と子供と、若い母親ばかりの保育園では、他に会おう若い男もなく、俺は安心してきっていた。

百子 ……お二人は付き合ってたんですね？

相良 しっ！ ここからが大事な話です。安心してきっていた俺は、重要なことを忘れていた。

忍 重要？

相良 ……告白です。

全員 ああ……

相良 気づいた時には、サオリはイケメンのシングルファーザーと婚約していました。

縁 もしかしてそれがショックで、入会を？

相良 新たな出会いがあれば、立ち直れるかと思って。

太一郎 で、何でそれが姉ちゃんなんだよう。

相良 コンピュータに聞け。相性度九十七パーセント。

縁 会員六万人の中から。六万分の一の、あなた。

相良 はい。

太一郎 姉ちゃあん。

忍 いいじゃないか、相良さん、いい人じゃないか。

縁 忍。

真琴 九十七パーセントじゃ仕方ないね。

相良 縁さんとは上手くいくような気がしたのになあ。

縁 相良さん。

真琴 べつにそんな、上手くいくでしょ？ ねえ？

忍 うん、相良さんは何も悪くないし。

百子 二人の結婚、認めてあげて。

太一郎 冗談じゃない。信用できるか、こんなやつ。

相良 お前に言われる筋合いはない。とにかく、これ（原稿）は全部、返してもらおう。

太一郎 あああ。

縁 相良さん。

蝮田 そんな、それじゃ私はどうすれば……

太一郎 こんな冷たいやつでいいのかよ、姉ちゃん。

相良 お前もプロならプロらしく、自分の力で何とかしろ。（ノートを出して）「やらないで後悔するよりも、やって後悔するほうが、きつとあなたは美しい」。

太一郎 捨ててくれ。

蝮田 そうよ、そうだわ、あなたが今すぐ書けばいいのよ。

太一郎 そんな。

蝮田 この私が手ぶらで帰るわけにはいかない。何が何でも書いてもらおうわ。

太一郎 今、それどころじゃないんです。見ればわかるでしょ。

蝮田 言い訳無用。書きなさい。

太一郎 無理です。

蝮田 今すぐなんとかして。してくれないと……

太一郎 （怯えて）なにになになに。

蝮田、三角倒立をする。ちようどそこに出て来る、お爺ちゃん。元に戻る蝮田。きよんとしている太一郎たち。

蝮田 どう？

太一郎 え、今のは？

蝮田 何か、こう、湧き上がってくるものはない？

太一郎 は？

お爺ちゃん おおおお。

縁 おじいちゃん？

お爺ちゃん 書きたい、小説が書きたい。

縁 お爺ちゃん！？

蝮田 しまった、お爺さんに三角倒立が効いてしまった。

真琴 なにそれ。

百子 どういうこと。

忍 まさか。

太一郎 これが、三角倒立の蝮田。

お爺ちゃん 紙、ペン……ああ、もういい。

お爺ちゃん、パソコンをすごい勢いで打ち始める。

百子 お爺ちゃんがパソコンを。

忍 すげえ、ブラインドタッチだ。

真琴 この人（蝮田）、只者じゃない。

蝮田 次こそ、あなたよ。じっとしていなさい。

太一郎 嫌だ、そんなの。

真琴・忍・百子、太一郎を羽交い絞めにする。

太一郎 お前ら！

忍 しっかり狙ってください。

真琴 ちょっと、じっとしてよ。

太一郎 やだ、やだ。

百子 何で。書けるようになるんだから、いいじゃん。

太一郎、廊下へ逃げ出す。

蝮田 待って！

蝮田・真琴・忍・百子、追いかけて廊下へ。

お爺ちゃん できた。

縁 え、できた？

相良 書きあがったんですか、もう？

お爺ちゃん ん。

縁と相良、パソコンを覗き込む。

縁 「うちに来てください」…なに、このタイトル。(少し読んで)…おばあちゃんとの思い出？ 本当の話？

お爺ちゃん ん。

相良 これは…

縁 お爺ちゃんの、プロポーズ？

相良 ですね。

お爺ちゃん (照れて) ん。

二人、最後まで読む。

相良 …縁さん。

縁 はい。

じつと見つめ合う二人…を、じつと見つめるお爺ちゃん。縁、バケツを拾い、お爺ちゃんにそっと被せる。あらためて、見つめ合う二人。

相良 今から僕のうちへ来ませんか。家族に紹介したいんです。

縁 本気ですか？

相良 本気です。

縁 …でも相良さん、まだうちの親に会ってないですよ。

相良 あっそうか。そうだった。また先走っちゃったな。

笑い合う二人。そこへ真琴と忍、「おとおお」と叫びながら駆け込んで来る。

真琴 書きたい、論文、書きたい。
忍 書きたい、履歴書、書きたい。

太一郎・百子・蝮田も駆け込んで来る。

蝮田 いい加減、じっとしなさい。

太一郎 絶対、やだ。

百子 どうしたの、お姉ちゃん。

縁 これ、お爺ちゃんが。

百子 えっ、もう書き上がったの？

太一郎 まさか。

相良 読んでみてください。

蝮田 (画面を覗きつつ) せっかくですけどね、お爺ちゃん。私が欲しいのはプロが書いた原稿なんです。だから申し訳ないけど、趣味の作文レベルのものは……(泣き出す)

太一郎 ええっ。

蝮田 なんて素晴らしいの。この原稿、ぜひ私に預けてください。ああ、今日、この家に来た甲斐があった。

太一郎 蝮田さん？

蝮田 まだいたの？ あなた、もういいわ。

太一郎 えーっ、ちよつと待って。俺はどうなるんですか。

蝮田 さあ。

太一郎 そんな……爺ちゃんに負けた……

百子 お兄ちゃん。

太一郎、ガクリと膝をつく。
相良、ノートを差し出して、

相良 読め。すごく励まされるぞ。

太一郎 (読みながら涙ぐむ) いいこと書いてる、俺……

相良 お前にやる。

縁 それ、心のバイブルって……

相良 もう要らなくなりました。今日から僕の心のバイブルは、縁さんです。

縁 ……はい。

百子 おめでと、お姉ちゃん。

縁 やだ、やめてよ、もう。

真琴・忍・百子、二人に拍手。
不意に、玄関の呼び鈴が鳴る。

忍 俺、出るよ。

忍、廊下へ。同時に電話が鳴る。真琴が出て、

真琴 ああ、お母さん？ ちょっと早く帰って来てよ……え？

蝮田の携帯が鳴る。出て、

蝮田 ああ、丸紅さん……え、なに？

真琴 (皆に) ねえ、なんかうちの前に人が大勢いて、お母さん、家に入れないって。

縁・太一郎・百子 ええっ。

忍、戻って来て、

忍 なんか、外、スーツ着た人がいっぱい……ちょっと怖そうな人たちなんだけど。

蝮田 (携帯を切って) 私と同じ取り立てのプロです。

五人・相良 ええっ。

蝮田 丸紅さんが、お姉さんから一ダース送ってくれと頼まれたので送りました、と。

五人・相良 ええっ。

縁 ああ、そんなこと、言ったような言わないような……
太一郎 どうすんだよ。

蝮田 そこに来ていいるのは、開脚前転の鬼塚、立位体前屈の鮫山、反復横跳びの権田原、その他諸々、原稿を回収するためなら、家の一軒や二軒、平気で潰すような連中です。

五人・相良 ええっ。

蝮田 彼らは私でも止められない。原稿を書くしかないわね。

太一郎 どうすんだよー！！

鳴り続ける呼び鈴と、「御殿場さーん」と呼ぶ大勢の声。
右往左往する兄弟姉妹と相良。バケツを被ったままのお爺ちゃん。
呼び鈴と声、だんだんと激しくなっていく——完全暗転。

【 終 】

【上演記録】

『うちに来るって本気ですか？』（改訂版）

テアトル・エコー SIDE B 公演
二〇一三年七月三二日～八月四日 恵比寿エコー劇場

作 石原美か子 / 演出 平野智子 / 演出助手 小山希美 / 舞台監督 金子武男
美術 根来美咲（青年座） / 照明 北島千尋（劇光社） / 音響 山崎哲也
衣装 中瀬古久美 / 宣伝美術 市川きよあき事務所 / 宣伝写真 三井実
企画協力 青柳敦子 / 制作協力 佐渡貴之 / 制作 澤山佳小里・平野智子

出演

立花かおる（御殿場縁） / 藤原堅一（御殿場太一郎） / 澤山佳小里（御殿場真琴）
徳永創士（御殿場忍） / おまたかな（御殿場百子） / 沖田愛（蝮田聖巳）
川本克彦（相良不見夫） / 保科耕一（お爺ちゃん）

【上演許可について】

本作品の著作権（上演権・映像化権などを含む）は石原美か子に帰属し、無断上演は禁じます。上演を希望する場合は、

- ・ 作品名
- ・ 団体名
- ・ 代表者名
- ・ 団体または代表者の住所
- ・ 上演日
- ・ ステージ数
- ・ 会場名および座席数
- ・ チケット料金
- ・ 動画配信あり／なし
- ・ 大幅な変更のあり／なし

を記載の上、メールにてお問い合わせ下さい。折り返し、ご連絡いたします。

脚本使用料

- ・ 有料公演 公演総予算の5パーセント（その金額が5千円以下の場合は一律5千円）
※公演総予算＝チケット料金×会場座席数×総ステージ数
- ・ 無料公演 5千円（高校演劇大会、カンパ制公演などを含む）

連絡先 Ishihara (プリント) office-moonstone.com

* (プリント) を@に直して送信して下さい。

石原美か子公式サイト <http://www.isiharamikako.com/>